

平林たい子『プロレタリアの星―悲しき愛情―』

―左翼運動の陥穽―

グプタ スウィーティ

はじめに

『プロレタリアの星―悲しき愛情』（初出『改造』昭六・八）は、社会運動家の石上、その妻小枝と同志安田という三人の人物にまつわる話である。石上は組合活動のために投獄され、獄中で拷問に耐えて同志の安田を守っている。留置場に知人の青年が入ってくると、石上は妻小枝のことを尋ねるが、石上の懸念した通り、小枝が安田と同棲している事実を知らされる。石上は悩み、一刻も早く出獄しようとする。一方、安田と同棲する小枝も重苦しい日々を送っていた。

先行研究で、小原元氏は石上の描き方について、「苦悩と闘う意志、敗北する感情にくるしむ自己が、私情のかけに完全にすがたを消したことは、よりつよく否定されねばならぬ」と指摘している。小原論について、中山和子氏は「一見理性ある批判にみえて、その実たい子の意図を理解しないものである」と批判し、「主人公の敗北の過程は客観的にみえて充分描かれているとはいいがたいにしても、まさに男女ののがれがたい「私情」をこそ描くことに、たい子の意図はあった」としている。また、「プロレタリアの女」というも

の社会的に無防備な弱さふがないさが、プロレタリア解放戦線の現実を大きく左右している」とした。その後、岩淵宏子氏が「階級問題にめざめても、妻を従属物視する男性中心社会の通念をぬぐいがたく残存させている男たちと、それに無自覚に従う女との、養われるという男女の関係性³⁾」が運動を敗北に導いていると分析している。

従来の論では、男女の関係性が左翼運動の問題の焦点になっていた。本稿では、時代背景に留意しつつ、左翼運動内部の男女の関係を再度検討し、先行研究で見逃されている組織内部の問題点や男性同志の連帯感の希薄さについても検証し、左翼運動の陥穽がどのように描出されているのかを明らかにしたい。

一 当時の左翼運動

本章では、プロレタリアの夫石上にとって運動をすること、つまり闘うことは何だったのかをみていきたい。作品内時間は、昭和二年からテクスト発表年の昭和六年の間と推定することができる。⁴⁾

まず当時の左翼運動の状況について確認する。日本の経済危機と左翼運動の状況について『労働運動史⁵⁾』において、昭和二年三月、

「金融恐慌と呼ばれる経済恐慌が勃発し、銀行・商社の休業・破産が全国的におこり、工場の縮小や閉鎖による労働者の解雇・賃金切下げが広範に」起り、そのような情勢のもとで労働者・農民の運動も発展したと述べられている。日本では昭和元年に初めて「合法的な社会主義政党（合法無産政党）が確立し、活発に活動を開始した。労働組合・農民組合もはげしい大争議をたびたびおこした」（傍線引用者、以下同じ）とある。また「対支非干渉運動のような帝国主義・反戦闘争も組織された」。昭和三年に「日本でははじめて施行された普通選挙に参加した社会主義政党は、四九万票（全投票数の五％）を獲得して、八名の代議士を国会に送った。非合法状態にあった共産党が、大衆の前に姿をあらわして、「天皇制打倒」をアピールして社会にショックを与えた」。そして、昭和三年三月五日、「大衆運動の高揚、とくに左翼の活動の活発化を重大視した支配権力は、全警察力を動員して、全国いっせいに千数百名の革命的な労働者・農民・インテリゲンチアを検挙した（三・一五事件）」。

さらに翌昭和四年四月一六日、「第二次の弾圧を加えた（四・一六事件）」。

このように、階級対立がきわめて先鋭化した情勢のもとで、昭和四年秋世界恐慌をむかえ、日本経済を渦中に巻き込んだ。工業恐慌は農業恐慌を伴って未曾有の大恐慌」となり、経済危機が昭和五年から六年へと深化していったと記されている。

本作の舞台となっている印刷工場に関する同時代の『読売新聞』の記事を概観すると、昭和二年一月八日、「秀飯社に争議―印刷工五十五名を誡す」では、「印刷工場秀飯社では昨年末不景気のため工場主から職工五十五名に給料一割五分の引下げを通告したところ去る五日の仕事初めに職工全部は罷業を申合せた上七日に至り従前

通り給料を支払わねば出勤せずと申出たが工場主側は職工全部を誡首した」と記されている。また、昭和六年一月一九日、「組合加入を嫌ひ突如、工場を閉鎖―東京印刷製本部に争議」では、「東京印刷製本社社印刷工余名中の六十名が数日前から工場内の組合組織を計画し総同盟系統の東京出版印刷工組合に加入した。これを知った事業主は、組合加入は不都合であるとし恰も事業不振なので突如」「工場閉鎖を行」い、職工連は「憤慨して工場に闖入門扉窓ガラス等メチャ、破壊した」とあるように、当時の争議が激しいものであったことが分かる。また同年六月一日「組合旗を奪はれ警官隊と大乱闘―天宮製作所争議の応援隊第三世煙突男等検束」では、「天宮製作所争議団本部に応援のため日本染絨職工並に東京印刷工聯合会・京濱合成労働組合員百五十余名が第三世煙突男千葉浩君を先頭にデモを敢行しアザ・ビラを撒布」したとある。

では、本テキストにおける左翼運動の様子をみてみると、「新聞値下げ以来賃金の低下」という描写があり、石上が勤めていた印刷工場でも経済恐慌による影響があったと推測できる。また次のような叙述もある。

ある組織の外郭員である石上の手から、ある闘士にひとまとめにして渡った印刷物について、新聞の印刷工だった石上は捕えられた。それを仕事の暇に刷ったのが町工場にいる安田だった。

石上は労働運動に携わっており、逮捕されていることがわかる。監視庁は石上の背後に「有力な印刷工グループの連絡を想像して調べつけ」ており、石上自身には「大して重きを置かず、印刷した所

と名前さえ言えば「釈放してもよいと言っている。実際に石上への信用で印刷の作業を引き受けてくれたのは「同志」の安田なのだが、頼んでやってもらった仕事なので、安田に迷惑をかけるわけには行かなかった。

そんな石上が留置場の中でどんな生活を送っていたのだろうか。

石上のいた留置場には四十人がいても「互いに交流がな」く、「人間と人間をつなぐ」「自由まで財布と帯と一緒にあずけさせられ」留置場は「物置小屋のように静か」だった。石上は留置場に入ってから六〇日も経っており、看守に「臭せえ」と言われるほど汚いシャツを着ていた。そして、掃除をさせられていた。掃除に使う雑巾は「放免された人達の残した手拭」で、「一枚を二つに切つてあるので、二つに畳むと掌にかくれる程小さかった」。そんな小さな雑巾で「床を二度拭き、机の足をふき、板壁を拭き」、「金網を拭き」、それだけでなく「幅の狭い窓縁に足をかけて天井近くまで手を伸ばす」のだった。留置場では、掃除は「どんな贅沢な場所よりも労力を惜しまず」に行われており、留置人にとって「筋肉に鬱積して来る労働の習癖で」、「苦しかった」のだ。掃除が終わると石上は、膝の上に胸をのせて、獣のようにうずくまり、「腹痛に堪えているに似た格好」をし、疲れ果てていた。その日の仕事が終わると、留置人は就寝時間を待つのだった。夜の睡眠は労役の唯一の「報酬」であり、「勤務のない場合には与えられ」ないほど、貴重なものであったからだ。また、「瘦せる程の屈託を忘れる唯一の時間」でもあった。後ほど詳しく触れるが、石上は妻のことを心配している時に重苦しい息の音が鼻から響くと、看守に変な声を出したのは誰だと聞かれた。返事が返って来ないから、もう一度「一段高く励ました声」で

聞き返し、「ようし、誰もいないなら、この監房は一人なし減食だ」と言った。その時、「俺だ」と石上が認めると、「俺とは何だ。出て来い」と怒鳴る。「俺」という言葉を使うことは生意気と思われていたからである。それは他の留置人にとっても恐怖の瞬間だった。そんな過酷な状況の中で石上は激しい拷問を受けざるを得なかった。

「石上を出してくれ給え」入って来ながら高等係が言った。

石上について高等係は廊下へ出た。草履を探している石上に言った。

「どうだね少しはへこたれたかね」(中略)

三時間たった。

乱れた足音が響いた。入って来たのは高等係の腕に支えられて垂れかかった石上だった。

「つかまれ、そこへ」(後略)

以上は社会運動や思想を取り締まる特別高等警察による拷問の場面だが、留置人に対する残酷な虐待が窺われる。看守の底意地の悪さは続くのだった。拷問が終わった後、看守は石上の「ふるえる左手」の中に紙が握られているのを見て、何を持っているのかを聞くが、石上は激しい拷問の後目が開かず、つぶったまま掌をさし出した。看守は紙を鼻の下へ持つて行くと、中に入っていた薬が鼻息で吹きとんでしまった。看守は「水道口で呑んで来い」と言うが、石上は歩けず倒れてしまった。そして「背中でザーザーと鼻を動かしながら這い」こんだ。薬を飲みたくても歩けない石上に看守は水を与

えるなどの心遣いを示すどころか、「したたか御馳走戴いたな」と拷問を受けたことを「ニヤリと笑って」意地悪く言うのであった。また、「苦しい拷問が連続されるだろう」という石上の台詞からは、過酷な拷問が頻繁に行われていたことがわかる。そんな厳しい状況に耐え続け、石上が「印刷グループ」の存在を明かさなければ何故なのだろうか。それは社会運動家として守らなければならない「プロレタリアの道德」の一つであつたからだ。「少数の英雄のみが実践し得る困難な道德ではな」く、「常識となつてプロレタリアの間に沁み渡っている基本的な道德」であつた。石上は二ヶ月、三ヶ月かかつてそれを守り続けることは覚悟の上だつたのだ。

作品内時間当時は左翼運動が盛んに行われた時期であつた。本テクトにおいても石上の社会運動への強い闘争心や闘っている姿が描出されている。

二 夫にとつての「闘い」と「愛」

留置場にいる石上の妻に対する思いについてみていきたい。石上は留置されてから六〇日も経つた後、ある日「おつ、石上は臭せえな」「そんな汚いシャツ取換えりゃいいがなあ。女房はないのか」と看守に聞かれると、「あるんだがどうしたか来ないんだよ」と何事もないかのように答えるのだが、看守との会話から石上には突然一つの「思念」が起こつた。小枝が差し入れに来なくなり、自分を「裏切」つたのではないだろうか。看守との会話がきっかけで、妻が来なくなつたことは繰り返しかかるようになり、以前から起こつていた「細かい思念」が「幅の広い苦悩に変化」するのだった。その時、留置場に新人が入つて来た。自分の「同志」だと石上は

気付いた時に、一瞬で、さつきから起こつていた「暗い苛立たしさが消え去つた」のだ。石上は妻の安否が心配で落ち着かないのだが、「同志」を通して「外の消息が知り得る希望」で、彼の「胸は疼き始めた」。長い留置生活で「弱り痛んで感じ易い」彼の心身に「歓喜が強い酒のように暫く沁みてめぐる」というところから、石上はどれほど妻のことを心配していたのか窺われる。妻のことを聞きたくて、石上は特高係に聞かれないよう低い声で二度も新人を呼びかけた。その声には「量り知れない感情の圧力」があつた。「同志」も石上だと分かつてうなずくのだが、高等係のいるところでそれ以上の発言はできなかった。「同志」は石上とは違う「角の監房」に入るこゝとなつたので、彼と話すことは簡単ではなかつた。石上は就寝時間前に看守の目を盗んで「同志」と話す機会を得られることに一所懸命だつたが、結局できないまま床に入ることになつてしまつた。一日の労役の後、疲れ果ててようやく得られる貴重な睡眠時間なのだが、石上はなかなか寝られず、「頻りに寝返る」ばかりだつた。やはり妻のことを確認しないではいられないゆゑであつた。翌日、石上はいつもの如く弁当配りの作業に出されたが、弁当を数えていた時に途中から数を混乱し、数え直したりした。心はそこにないために「まごつき」ながら、作業を間違えた。そして、昨夜「同志」を見た時に現れた「歓喜」はもう消えており、石上は頻りに「不安」を感じていたのだ。何度もの努力の末に、やっと石上は「同志」に近づくことができた。

相手から遮二無二返答を奪ひとつてやりたい程、質問の条項が湧き立つて数々彼の胸にあつた。彼の唇は吃つた。

「僕の女房はど、どうしている?」

胸の中で踊り騒いでいる無数の言葉の中で、咽喉を突き破って送り出した最初の言葉は―それだった。

「君はどうして入って来た?」或いは「Sの方大丈夫か」

等々一言で言える重要な会話だ、同時にこの時可能だったにもかかわらず石上の選んだ言葉はそれだった。

社会運動家であるにも拘わらず、石上にとって一番気にかかっていたのは「同志」の逮捕の理由ではなく、運動の進展などのことなく、妻のことであった。「あとで:あとでゆっくり話すよ」という「同志」の答えが「見当はずれ」で、石上はすぐに教えてくれない「同志」の反応に一層の「不安」や怪しさを感じた。石上の「思索」は「渦のように」「ぐるぐる回った」。「―やっぱり俺の想像通りだ。きっとそうに違いない。あの女は俺を―」とあるように、石上は外にいた時から妻と安田に関する疑惑を少し抱いてはいたのだが、「同志」の反応を見ることによってその少しの疑惑がより強いものに「変化」していったのだ。

「あの女は俺を裏切った」という石上の妻に対する言葉遣いから、一家の生計を支えていた自分が逮捕され、妻の生活はどうなっているのかというようなことではなく、自分のものが奪い取られ、「裏切」られたのではないかと悩んでいるのである。彼は小枝を自分の所有物としてしか扱っていないのではないだろうか。その後、「同志」は塵紙に石上の妻の情報を書き、別の留置人を通して、石上まで届けてくれた。それを読んだ石上は、妻が安田の家に「引き取られている」ことを確かめられた。「―既に家庭での幸福は余す所な

く奪いとられてしまったのだ。同志である安田の手を通じて、―否、安田の手に―」と石上は心の中で叫んだ。石上は妻にも「同志」にも「裏切」られていたのだ。

妻にも「同志」にも「裏切」られたことは石上に思いがけない「変化」をもたらした。捕えられた当時警察官に接触する度に「飛び散った反抗心の火華」、留置場内での「沈黙の中にあつた今後への見通しについての確信」や「勇氣」などが「摺り減らされ失われ」ることであった。「新手法厳しい拷問」とあるように、一番信頼していた妻と「同志」に「裏切」られたことは、彼にとつてとても衝撃的であった。「肉体の外側からの拷問ならば泣き喚き氣絶し、氣絶したふりをし、どうにか切り抜ける」が、「中からの拷問には何をもって防ごう」とあるように、逮捕されてから日々留置場で受けなければいけない過酷な拷問にはどうにか耐え、乗り越えることができた。しかし、今まで留置場の厳しい状況の中でも屈せず、守り続けたその「同志」に「裏切」られては乗り切る方法がなかった。「豪毅な何物にも屈せぬ階級意識の外に、それに値するものはない」。しかも、「その階級意識を支える強力な柱―労働者として生まれながらに持っていたかのように信じた」彼の「強靱な忍耐力は、既になかった」。石上は強者から弱者へと「変化」しており、彼自身にとつてもそれは「思い設けぬ変化」であった。

最初に彼から「失われたものは不羈な自信」だった。自信は彼の「内面生活の、全建築の土台をなすもの」であった。それが失われた時、「忍耐やねばり強さの印刷労働者らしい特徴は脆く崩れた」。プロレタリアの夫であった石上は「一方は愛に重点を置き、一方は闘いに重点を置くとしても、愛と闘いとに分裂がない間は同義語

だった」が、石上の心の中に妻への「愛」と社会運動家としての「闘い」との間に葛藤が起こっていた。以前は「愛するがゆえに闘う。闘わんが故に愛するのだ」とあるように、「愛」することと「闘う」ことには矛盾がなかったが、今は「愛」を守るか、それとも社会運動家としての使命を果たすか、どちらかを選ばなければならず、彼にとって難しい選択であった。しかし、石上にとっての「愛」とは、妻を守り、慈しむというようなものではなく、妻に対する所有欲である。「愛するが故に闘ってはならぬ。愛するが故に妥協して一日も早く出なければならぬのだ。そうでなければ、あの女は食うために永久に俺から」とあるように、石上は外に出て妻を助けたいと思うのではなく、妻が仲間に奪われ、自分のプライドが傷つけられたから自分の物を取り戻したいと思ったのではないだろうか。最後に、「いつでも安田の名前を言う機会が目の前にブラ下っている」と思った石上は、とうとう「プロレタリアの道徳」からずれてしまい、今まで精一杯守っていた「同志」の名前を明かすことを決意していくのだった。

三 妻にとつての「生活」と「義務」

前章では妻にも「同志」にも「裏切」られ、運動への闘志を失った石上の姿をみた。では、何故小枝が石上を「裏切」ることになったのか、またそれに対する小枝の気持ちはどうなのかみていきたい。まず、石上が逮捕された後の小枝の生活状況をみてみよう。生計を支えていた石上がいなくなると、「生活と呼ぶ容赦ない波」は、直接「目がけて打って来る」のだった。まず、小枝は家賃を払うことができず、材木屋の家主が木材を動かすなどの仕事をしていた時の

姿を見たり、あるいは声を聞いたりするだけでも、家賃のことを聞かれることを恐れ、「緊張を覚える」のだった。家賃の次は石油で、「欠乏は大きなものから小さなものへ遠巻きによせつづあった」。小枝は残った石油の分量を知るために、暗い台所から罐を持ち出した。「ブリキ罐の側はベカリとたやすく凹み、またベカリとたやすく戻った」。それは中に、石油でない空気の充滿していることを示すものだった。しかし、底の方で「水よりも少し粘った手応えがあった」。隅の穴を片目で覗いてみたが、暗くて見えなかった。小枝はどうしても石油の分量を知りたくて、それを知らずには何も手につかなかった。今度は台所から湯屋へ持って行く小さい洗面器を持ってきた。背の子供をずり上げて目で分量を計り、五日分位残っていることを確かめた。しかし、五日後のことは心配だった。消費組合から借りられるのかと思ひ、今度は消費組合の定価表を確認することにした。消費組合とは、「商人の仲介的利潤を廃棄し、消費者の生活を擁護するため労働者農民が、直接生産者から物質を購入し、分配するための組織⁶⁾」のことである。消費組合からいつも工場の帰りに品物を買ったり、運んだりするのは石上だったので、彼女は定価表を見るのも不慣れだった。「どこ行っちゃったのだろう」と石油の欄を必死で探し、「二段に印刷した日用品の名称の上」を彼女の「視線は行ったり戻ったり」した。やっと見つかった。「石油と米は現金断行」と書いてあり、小枝の懸念したり通り石油は現金売りだったのだ。消費組合の現金売りの「規約は曲げられない」ものではなかったのだが、小枝には消費組合に関しても「物売る」という「商業的機能以上の知識」はなかったのだ。以前「争議の応援米を集めに来た常任者が戻ったあとで、あの米を袋に入れて今一

度組合員に売りつけるんじゃないだろうか」と小枝が言った時に、石上に「怒鳴りつけられた」ことがあったのだ。以上より、小枝が夫の関わっている社会運動について無自覚で無知だったということと、夫の不在によって生活に困っていることが窺われる。

石油に代わる木炭は半月分位はあったが、関西育ちで石炭ガラを使つて育ち、子供の時から「節約する」ことを教えられていた彼女にとって、木炭は「恐ろしい程贅沢な燃料」で今まで使わなかったが、炊事に使うとしても、それがなくなるまでに石上は帰つて来るだろうかと小枝は考えた。幾度か、明日は、一週間経つたら、十日したらと「むなしく」待ったが、「一月後に戻ることも一年後に戻ることも、否一生の間に戻ることもさへも」既に彼女には「信じられなく」なり、「孤独と窮迫の感」で胸を締めつけられるのだった。

さて、何故彼女は何事に関してもそれほど無知で無力なのだろうか。その原因は小枝を取り巻く男たちにあると言える。まず、小枝が結婚前に受けた「教育」についてみていく。小枝は小商人の父親に「弱く控えめで、可憐な響きを持った名前」を付けられた。「幹ではない枝」しかも、「大きな枝」ではなく「小さな枝」。男は「幹」に、女は「枝」に例えられており、女は自立し、自分の力で生きていくのではなく、夫に支えられながら生きることこそが女にとっての「幸福」だと父は信じていたのだ。小枝は「主張する代りに同情を招け」、「働いて食う代りに愛されて食え」と教えられた。父によると「ただ節約することと台所を清潔にすることの外には」、「何の身につく技術も」「不要だった」のだ。明治以降日本には封建的家父長制度があり、女性の家父長に保護・支配されるべき存在で、家事と育児のみが女性の役割であるかのように考えられ、一個の人格

として意志を持つことは大変難しかった。明治生まれと考えられる小枝の父も保守的な考え方を持っており、小枝を自分の意志で生きさせることなく、彼の考えを押し付けたことは推測できる。小枝は独り立ちできるような女性ではなく男に「寄生」するような女性として育てられたと言える。従つて、「撓みやすい」小枝は、結婚後に夫を「たのみの強い幹」と信じて「寄生」して来たのだ。そして、印刷工の夫がとつて来る「僅かな賃金の中に、不安でささやかな生活の葉をひろげた」。夫のものは「人生の風をやり過ぎし、早から洪水から救われる」「場所」だと考えられた。しかし、石上は女に對して「内気で従順な女が好き」で、一章でみてきたように命をかけて闘っている社会運動家であるにも拘わらず、妻を人格を持った対等な存在として見るのではなく、自分の所有物としてしか扱わなかったのだ。社会運動家の石上の差別的な女性観は一般人の父のそれと少しも変わらなかった。

一方、石上の所属している印刷工組合の幹部は、「所謂プチブルで、階級運動に縁遠く、また縁遠からうとするものが多」くいる所に住んでおり、「二人の子供」を「小ブル私立学校に入れ、費用のために絶えず付近を借り回つて」いた。「この度の出来事に対して最初に最高の驚愕を示した。そして冷静に戻ると最低度の冷淡で装つた」とあるように、石上が捕えられ、家族が生活に困っていることに對し、「冷淡」であり、何の支援や協力をしようとしなかった。本来「同志」であるはずの組合の幹部と石上の連帯感が希薄であると言える。石上のいた新聞社の铸造部が、幹部に秘密に女工の手で救援を計ったのだが、その救援金も清子という女工の個人的な都合で遅れてしまつていた。小枝は精神的にも経済的にも追い詰め

られる状況に陥っていた。

その時、小枝に援助の手を差し伸べたのは夫の「同志」安田であった。安田は石上の家族を助けることは留置場で自分を守っている石上に対する「義務」だと思い、組合の幹部に「女に罪はあるまい」と弁解した。特に安田は石上と親しかったので、幹部も何も言わなかった。しかし、安田も石上と同じに、「内気で従順な」女が好きだったので、安田の「義務感の裏」には小枝に対する「強靱な野望」があった。安田は頻繁に小枝を訪ねるようになり、安田の経済的援助を受けることによって小枝は「貧乏」を遮ることができた。まず、家賃を払い、家主を恐れなくなっていた。「彼方には油煙で黒い石油焔炉が、使わないと見えて新聞紙をかけて」おり、また「炭など吝にするなよそうや」という安田の台詞からも小枝の家でもう「石油」は使われなくなり、「贅沢な燃料」とされていた「木炭」を使用するようになっていたことがわかる。以前と比べて「見た所では」、「カルケットの箱」があることと、小枝の「首に灰色の練白粉」があることしか違っていなかったが、「目に見えない所には相当の変化があった」。「カルケット」とは、「カルシウム入りの牛乳ビスケット」のことで、当時においては贅沢なお菓子であった。お金に困っていた小枝は「カルケット」も「白粉」も自分では購入できないもので、安田からの贈り物だったと思われる。後ほど触れるが、小枝と一緒に「文化住宅」に引越すところからも、安田は自分の経済力をアピールし、自分の嗜好に合った小枝を手に入れるために高いお金を使っていたと言える。一方、生活が安定してくると、小枝は「安心」し、安田に対して「尊敬」の気持ちを抱くようになる。また、「尊敬の燃焼から反射する小さい明度で、孤独

な心を照す」。以前生活に窮迫していた時の小枝の「不安」な姿は「浮浮と子供をあやしている」姿に「変化」していたのだ。小枝が取り戻した平和は、石上がいた時と全く同じ性質のものとなっていた。

しかし、「とうとう家が見つかったよ。あさって休んで越すことにしたがね」、「勿論あんたもだよ。石上には僕から手紙出しとく」とあるように、安田は小枝の意志を聞くことなく、自分の個人的な決定を下し、それを小枝に押し付ける。安田は「同志」の妻を助きたいという気持ちだけ持っているのであれば、新居に越す必要もなく、夫婦のように暮らす必要もなかったが、小枝と同棲したいという意志には彼の欲望が現れている。石上に手紙を出すというのも、小枝を同棲することに納得させるための嘘に過ぎなかった。安田の、石上の妻を引き取るという行為や、「女房の食う心配も碌にしないでおいて、左翼だなんて生意気だ」と石上の「悪口」を言うところからは、同じく社会運動に関わっている「同志」の石上と安田の互いの連帯感の薄さが窺われる。また、安田の運動に対する気概の乏しさも指摘できる。

安田との同棲に関して小枝の気持ちはどうなのだろうか。「男女の当然置かるべき関係以外の同棲」について、「見聞の狭い」小枝の顔は「苦し」い無表情であったが、「悲しそうに縮んで行った」。小枝には安田との同棲に対して抵抗感があり、石上の信頼を「裏切ることは相当辛いものであった。しかし、小枝には「一緒に棲み、食わして貰う以上、そうなることは義務のようにさえ考えられる」のだった。

「自分にも少し何か出来たら！子供を安心してあずけられる所さえあつたら！」

はじめて意識の中で小枝はそう叫んだ。だが、この場合、そんなつぶやきは何の役に立とう。

すべては既に決定されている。小枝自身が既にその決定に服してしまっている。

叫びはこの無力さこの貧しさへの抵抗の、最後のスパークでしかなかったのだ。

子供について、「襤褸から出た鰻のような二本の足」という描写から、小枝は乳飲み子を抱えていることがわかる。日本では昭和六年一月に無産者の手で無産者の子供を守り育て、働く婦人を二重の労働から解放するという目的で初めて無産者託児所が開所されたが、作品内時間当時は小枝が子供を預けられるような場所がなかったと言える。夫に対する「義務」と「生活」との葛藤の末、小枝は「どこもない沈黙の後」、「小さい努力をもって」一緒に住むことに賛成した。小枝にとって生きていくためには安田に「寄生」し、石上を「裏切」ること以外選択肢がなかったのだ。

安田が選んだ引越先は「郊外」の「文化住宅」であった。「文化住宅」とは、大正後半期から昭和前期にかけて、サラリーマン、都市知識人ら都市部の中流層が洋風の生活に憧れ、一部洋風を採用入れた和洋折衷の文化住宅が大都市郊外に多く建てられ、生活上、簡易・便利な設備の整った新形式の住宅である。またテキスト中の「屋根も塀も煙突も黒い江東から来ると、ここは何といろいろな色をもった広い眺めだろう」という描写からも、小枝の新居は以前の

家と比べてきれいで、便利な設備の整った快適で居心地のいい場所であったことがわかる。小枝の生活水準は向上したと言える。環境が変わり、新しい生活が始まることによつて小枝の「頭に詰め込まれた憂愁も、呵責も、浅い春の風に暫くは散らされた」が、次の場面にも見られるように小枝の心の中に絶えず葛藤が起こっていた。

何とはない重苦しい心地になつて、小枝は庭に出るのだ。

自分はこれでよいかしらと、彼女はそして自ら問うのだ。それは何という愚かな問だろう。

省線の信号燈が動く。

赤―青―赤―青：

小枝は安田と一緒になつてから生活も安定し、以前より快適な暮らしをしていたはずなのだが、夫に対しては申し訳ないことをし、良心の「呵責」を感じ続けていたのだ。

おわりに

本稿では、プロレタリアの男女の関係性について検討し、かつて指摘されて来なかった左翼運動の問題点についても明らかにした。

左翼運動が盛んに行われた時期に社会運動に携わっている石上も当初強い闘争心で闘っていた。石上は投獄され、残酷な拷問にも屈せず「同志」の安田をかばい続け、「プロレタリアの道徳」を守っていた。しかし、石上は妻を、身を挺して守っている「同志」に奪い取られ、今まで自分を支え闘いの原動力となっていた妻にも「裏切」られて、強者から弱者に「変化」し、運動への闘志を失つてし

まう。石上は「愛」と「闘い」との葛藤に苦しみ、本来の社会運動家としての使命から逸脱してしまった。

一方、一家の稼ぎ手であった夫がいなくなると、男に「寄生」する生き方しかさせてもらえなかった小枝は生活に窮迫した。小枝は安田の金銭的な援助を受けるだけでなく、安田と同棲することにも服してしまっただが、夫に申し訳ないことをした「呵責」の気持ちで、「妻としての義務」と「生活」との葛藤に絶えず悩んでいた。

従来論では、プロレタリアの女の「社会的に無防備な弱さ」がないさ」がプロレタリア運動を敗北に導いたと指摘されていた。確かに小枝には「無防備な弱さ」があるのだが、そういう女性を作ったのも男性中心社会なのではないだろうか。小枝の「弱さ」の原因は、小枝を取り巻く男たちの差別的な女性観にあったことは明らかである。また、同じ社会運動に関わっている男の「同志」たちの、お互いに対する連帯感の希薄さも運動の敗北の原因なのではないだろうか。逮捕された「同志」の妻が生活に苦しんでいるにも拘わらず、一切の手助けを断るというような幹部たちの存在も見逃すことはできないだろう。本テキストは、左翼運動を倒す国家権力の暴虐非道だけでなく、運動家が自ら落とし穴を掘り、敗北を招いたことを明らかにしていると言える。

本テキストは昭和六年に発表されているが、平林たい子はその前年に文芸戦線派から脱退し、国家権力及び左翼運動内部の様々な否定的側面を自由に描くことができたのだと思われる。

注(1) 「平林たい子論」〔批評の情熱〕 雄山閣 昭和二三

(2) 「平林たい子―初期の世界―」〔文芸研究〕 昭五一・三

(3) 「女と言説」〔有精堂編集部編『講座昭和文学史』第一巻 昭六三・二)

(4) 当時印刷争議が頻発していたことが同時代の新聞から確認できる。

(5) 塩田庄兵衛「一九二九―一九三九年における日本経済危機と労働運動」(歴史科学体系三五『労働運動史』 校倉書房 昭五六・一一・一五)

(6) 松井栄一他『近代用語の辞典集成 三〇』(大空社 平成八・二)

(7) 「乳業カルケットデー」〔朝日新聞〕 大正一一・一二・一七

(8) 昭和の無産者託児所については、村岡悦子「昭和初期の無産者託児所運動―福祉運動と労働運動との最初の結合」(『三田学会雑誌』 昭和五九・八)を参照した。

(9) 文化住宅については、内田青蔵「文化住宅」物語―ナオミの家ができるまで」(『東京人』 平成一一・五)を参照した。

〔付記〕本文引用は、『平林たい子全集』第一巻(潮出版 昭五四・四)に拠る。